

平成 26 年度 群馬大学教育学部 障害児教育専攻

推薦入試問題（小論文）

解答上の注意

- (1) 小論文の解答時間は 90 分です。
- (2) 問題は 2 つあります。両方に解答してください。
- (3) 解答用紙 2 枚それぞれに、受験番号を必ず記入してください。
- (4) 問題用紙、下書き用紙、受験票は各自持ち帰ってください。

問題 1

下の文章を読み、筆者が「もしも人間が昆虫のように変態するとしたら、その身体の変化を考慮せずに脳だけ研究することは無意味なはずだろう」（下線部）と述べる理由を、本文に基づいて 600 字以内で論じてください。

<環境との関係性としての心>

「愛する」というのは心の働きであろう。しかし、心（脳）の中で愛という思念が生じていることが、愛するということなのだろうか。

「心が愛する」、あるいは「脳が愛する」という表現と、「太郎が愛する」という表現を比べてほしい。「心（脳）が愛する」とはかなり人工的な言い回しに思われるだろう。「太郎が愛する」の表現が、多様で、具体的で、身体を伴った愛のやりとりを思いつかせるのに対して、「心が愛する」の方は抽象化され、無個性化されている。さまざまな行為の集合として愛があるのではなく、あたかも愛するという行為に抽象的な本質があり、心がそれを思念しているかのようである。

相手とのやり取りを含むはずの愛するという行為は、愛するという思惟しゐと同一視される。だが、「愛するという思考」とは何のことをいうのであろうか。「愛しています、愛しています」と内語（発声しない音量を絞った発話）を呟つぶやけば、愛していることになるのだろうか。

身体のない愛、対象（この場合、恋人）との一切のやり取りのない愛は、愛の名に値するだろうか。

「考える」についても同様である。たとえば、「売れる新製品を考えなさい」という指示を会社の上司から受けた場合、その問題について何の行動もせず、ただ空想を繰り返したところで「考えた」ことにはならないだろう。この場合の「考える」とは、試供品を配って調査し、他社の同種製品と比較し、市場のさまざまな情報を集めて最終判断をくだすといった一連の過程を指すはずである。それは、文字通り、額に汗して到達できる実務的な仕事である。

ところが、「この問題について心だけで考えておきなさい」という指示ならばどうだろうか。おそらく、あなたはほとんど何もしなくてよいだろう。もちろん、そうした指示をする上司は、実社会ではないはずである。

私がここで問いたいのは、対象の性質やそれに向かう行動の性質から完全に独立した「愛すること一般」、あるいは「思考すること一般」というものが存在するだろうか、そして、そうしたものが心＝脳の中に存在するといえるだろうか、ということである。

「愛する」「考える」といったことは、実際には、現実世界との双方向的なやり取りの中で成立する過程であり、対象やそれへの行動から切り離してそれらの行為そのものを抽出することはできないように思われる。愛する心も考える心も、それが働きかける外的環境と、働きかけるための身体を必要とする。愛も思考も拡張した心によって実現する。頭の中でなされていることは、そうした身体と環境をめぐる拡張した心のサイクルの一部なのである。

<身体性>

拡張した心を主張する哲学者がとくに重視するのが、身体の役割である。これまで述べてきたように、「心」と呼ばれる働きの多くは、環境との相互作用によって成立するが、環境とのやり取りを担っているのが身体だからである。

かりに、身体活動を制御するのが脳であるとしても、脳の制御はすでに一定の身体特性（サイズ、材質、形状、内部構造、可動範囲）を前提としており、それから独立した制御などありえ

ないであろう。

人間の脳は、身体を原子レベルから再構成するようなプログラムを実行しているのではないし、筋肉の線維一本一本の構成を分子レベルから組み立てるような指令はしていない。骨格をどのように構成するか、筋肉をどの方向に収縮し弛緩するかについてさえ指令していない。身体の特性とその振る舞いの効果については、脳は何の制御も行うことはできない。それらはすべて身体の中に書き込まれている。むしろ、脳が行う制御は、身体の特性或振る舞いが環境に対して一定の効果をもたらすことを最初からの前提としている。

したがって、脳が出す指令があるとすれば、そのヴォキャブラリーも文法も、身体という言葉で書かれているはずである。単純に言えば、脳の方が、身体有能力、身体がもつ外界への効力に完全に依存しているのである。

極端な想像であるが、もしも人間が昆虫のように変態するとしたら、その身体の変化を考慮せずに脳だけ研究することは無意味なはずだろう。身体こそが環境と交流するのであり、その身体あつての脳である。知覚のような環境の認識においても、身体は探索的に環境を動き回って情報を獲得する。環境の中で活動し、そこに働きかけながら影響を受ける身体なしに、心は成立しないのである。

出典 河野哲也(2008)『暴走する脳科学－哲学・論理学からの批判的検討－』。光文社新書。
(出題にあたり一部改変)

問題 2

「はないちもんめ」という遊びについて、杉本（2011）は次のように解説している。

2組に分かれて、横一列で並び、「勝ってうれしいはないちもんめ」「負けてくやしいはないちもんめ」と歌いながら、相手の組から欲しい子を指名し、じゃんけんで勝った方がその子を自分の組に入れるという単純な遊びである。一説には、口減らしのための人買いがこの遊びのもとになっているといわれているが、遊ぶ子どもはそんなことは知らない。それよりも、自分が指名されず、最後まで残ってしまったらどうしようという不安な気持ちでいっぱいになるのだ。これも、独りぼっちになってしまう怖さである。

同様に、子どもに人気の遊びである「かくれんぼ」も、実は怖い遊びの一つであるとも言われる。「かくれんぼ」がどのように怖い遊びであるかを分析し、それでも子どもに好まれる理由を600字以内で述べてください。

出典 杉本厚夫（2011）『「かくれんぼ」ができない子どもたち』，ミネルヴァ書房。
（出題にあたり一部改変）